

## 0～6歳はどんな時期？

### ●幼年期の前半は「運動」「言葉」の敏感期

第1章で紹介した「幼年期」「児童期」「思春期」「青年期」の4つの発達段階の中で、「幼年期」にあたる0～6歳は、特に変化が大きい時期です。

「幼年期」はさらに、0～3歳までと、3～6歳までの時期に分けられます。

0～3歳ごろまでは「運動」の敏感期。子どもは盛んに身体を動かしたり、手あたり次第に物をつかんだりします。そうやって、その後のすべての活動の土台になる、自分の身体を思い通りに動かす能力を獲得していきます。

この時期は「言葉」の敏感期でもあり、0～3歳の子どもは、自分が住んでいる土地の言葉をそのまま吸収します。この時期に習得した言葉が、子どもにとっての母国語となります。

意識的に努力せずとも言語を吸収して自分のものにできるのが、この時期のすばら

しいところです。子どもが言葉の敏感期にある間は特に、大人は美しい会話を心がけ、話し方の良いお手本を示したいものです。

### ●「いつでも同じ」であることを好みます

もうひとつ、早い時期から表れてくるのが、「秩序」に対する敏感期です。

小さい子どもというと、動き回ってばかり、散らかしてばかりで、困ったものだという見方が一般的です。しかし実は、生まれてから2歳半ぐらいまでの時期の子どもは、ものがいつも同じ場所で、同じ状態であること、秩序正しい状態であることを好みます。モンテッソーリは、この時期の秩序へのこだわりを、子どもの「秩序感」と呼びました。

0～3歳の子どもは、わけもなく泣き出したり、ぐずったりして、大人をイライラさせることがよくあります。そんなときの子どもの不機嫌は、子どもなりの秩序感が乱されたためであることが多いものです。いつも上着を着てから帽子をかぶるのに、今日に限って帽子を先に差し出された……。たとえばそんなことで、お出かけ前にかんしゃくを起こします。